

せせらぎの価値を伝える

「高瀬川は貴重な『環境文化資源』。せせらぎが、京都という大都市の真ん中に残され、そのことを大切にしている人々が暮らしていることの価値は大きい」と話すのは、高瀬川にまつわる記憶を記録し発信することで、川の価値を伝える『高瀬川ききみる新聞』を発行する「高瀬川ききみる会」の堀江典子さんだ。取材を通じて、地域を牽引してきた人々の高瀬川に寄せる想いの深さは、川での体験の豊かさからきていると感じるという。「高瀬川周辺では、最近、そこで暮らしたり、働いたりする人々の間でコミュニケーションが十分ではありません。このままでは高瀬川にまつわる記憶や、景観が受け継がれないのではないかと。人々をつなぐきっかけをつくりたい。そんな想いで新聞を発行しています。高瀬川をメディアとして人の環を広げていければうれしい」と語る。

都市の大切な潤い空間

「現在、高瀬川では2014（平成26）年に開削400年を迎えたこともあり、地域の意見も反映しながら再生プロジェクトが進んでいます」と話すのは、京都市建設局土木管理部河川整備課の田中博文さんだ。京都市では高瀬川を都市部における魅力ある水辺空間と位置づけている。まだ計画段階だが、京都駅東南部エリア活性化方針が策定され、再開発予定地域を流れる高瀬川は、京都駅近くに移転してくる予定の京都市立芸術大学と再開発エリアを結ぶ魅力的な水辺空間として整備されるという。

高瀬川を名所に、子供が水遊びできる環境に

高瀬川の環境保全に取り組む保勝会のひとつ、永松高瀬川保勝会で会長を務める金子明さんを訪ねた。せせらぎを身近に感じることができるカフェ『ひとこえ』でお話を伺う。「地域で活動を続けていると苦労も絶えませんが、関わる相手の想いを汲んで動くうちにお互いに通じ合い、いい環境を作ることができる。そんなことも経験し、保勝会の活動に関わり続けています」。『ひとこえ』のオーナー田中俊雄さんも加わる。「子供のころは川に入って魚を捕ったり、よく遊んだね。子供たちが自由に川で遊べる環境をまた作りたい」と川談義が始まった。

大人の夢も膨らむ高瀬川

カフェ「ひとこえ」の近く、高瀬川沿いのギャラリー「高瀬川・四季AIR」を訪ねた。オーナーの前川八洲男さんは「高瀬川ききみる会」の事務局長で仕掛け人。ギャラリーは会の活動拠点にもなっている。当日の展示は「京都市電物語」。高瀬川と市電？前川さんに聞くと「高瀬川沿いにもかつて市電が走っており、それになんでの展示です」。京都市電の写真や、手作りの模型、昔の切符。2階には鉄道部品も。訪れたある女性は「私の父は昔、市電の車掌で」、また別の女性は「確か初乗り運賃は・・・」市電の思い出話に花が咲く。前川さんが「高瀬川沿いに路面電車を復活できれば面白いと思っています」と話し始めた。初夏の夕暮れ。せせらぎの音と心地よい風。この地域の汚水と雨水排水をしっかりと下水道が担っていることも一つの支えと言えるだろうか。夢物語を聴くにはいい雰囲気なのだが、新幹線の時間が迫ってきた。



左から、高瀬川の始まり一之舟入付近、カフェ『ひとこえ』での語らい、繁華街の真ん中のせせらぎ